

『オバジーヌの聖エティエンヌ伝』試訳（一）

北 館 佳 史

本稿は『オバジーヌの聖エティエンヌ伝』（以下『伝記』）の試訳であり、ここでは第1巻の1章から16章までを訳出する。11、12世紀には西方キリスト教世界で使徒的生活を理想とする隠修士の活動が復興し、その影響で修道院の世界の改革も盛んになるが¹⁾、『伝記』が描くのはフランス中部の隠修士・修道士の世界である。リムーザン地方の名家に生まれたエティエンヌは司祭の活動の後に回心して隠遁し、多くの男女を集め、オバジーヌの森に隠修共同体を形成した。紆余曲折の末に当時急激に拡大していた新興のシトー会に加盟し、亡くなるまでこの共同体を導いた。『伝記』はこのオバジーヌ修道院の創建者・修道院長の生涯と奇跡を内容とするものである。

この聖人伝に注目が集まり、最初に史料が刊行されたのは17世紀に遡る。記念碑的なシトー修道会史を記したA・マンリケが多くの抜粋を引用したのに始まり、続いてボランディストが『アクタ・サンクトールム』でシトー写本に基づいた版を部分的に刊行した²⁾。中でもE・バリユーズがオバジーヌの写本に基づいて完全な版を刊行したのが重要な功績であった³⁾。20世紀後半にはM・オブランがバリユーズ版を底本にした校訂版を刊行し、現在の研究の基盤を築いた⁴⁾。一方、オバジーヌ修道院の研究を大きく進めたのはB・バリエールであり、聖人伝と並ぶ主要史料であるカルチュレルを刊行し⁵⁾、この二つの史料による総合的な研究と多数の個別論文を公表した⁶⁾。この浩瀚で饒舌な『伝記』の内容の豊かさは近年でも様々な

観点から分析されていることにも示されている⁷⁾。

『伝記』の匿名の著者に関しては、2巻11章に自伝的な情報が記されている。著者はラ・シェーズ・デュー修道院の子院に奉献され、養育された後に一時的に世俗での生活を送ったが、エティエンヌの助言により、院長レナル（1133-50）が治めるシトー修道院に送られ、2年間滞在した後、オバジヌに呼び戻され、その後は、修道院に留まり、エティエンヌの側にいたとされる。

『伝記』はこの匿名の著者によって2つの時期に作成された。第1巻は1159年のエティエンヌの死後間もなく執筆が開始され、院長ジェロー1世のもとで作成された。1164年のこの院長の死から14年ほど執筆が中断された後に、残りの第2巻と第3巻の作成が開始されたのは1178年頃であり、これらの巻の執筆が完了したのは院長ジェロー2世のもとで1190年頃であったと考えられている⁸⁾。

1巻は誕生から修道院創建までを内容とし、世を捨て森の中で隠修士としての生活を送り、オバジヌとコワルーの二重修道院を創建する過程が語られる。この巻の中心は共同体の禁欲生活であり、エティエンヌは過剰なまでに厳格で涙の恩寵を賜る謎めいた人物として描かれる。2巻は院長就任、シトー会への加盟、教会建設の経緯と生前の奇跡を内容とする。前半ではコワルーの生活やシトー会への同化の問題が扱われ、後半では様々な種類の奇跡話が語られる。ここでは聖人は地域の有力修道院の指導者となっている。3巻は聖人の死と葬儀、死後の奇跡を扱うが、死後も聖人が共同体に留まり続けることが強調され、奇跡を通じて地上の出来事に介入する姿が描かれる。

著者は話の信頼性に顧慮し、エティエンヌ本人や他の修道士が証人であること、時に自分が直接に目撃したことを記し、筆者が知らない初期については、ベルナルが情報源であることを明記している。このように話の信頼性を高めようと努めているが、叙述は聖人伝の論理に従っており、列

聖を睨んで超自然的な力を発揮する聖人として宣伝することが執筆の目的になっている（実際に列聖されたのは18世紀）。また、グレロワが指摘するように、共同体内部の対立やシトー会への同化の問題が叙述の各所に微かな痕跡を残している⁹⁾。『伝記』の手稿はオバジーヌとシトーが所蔵していたが、シトー写本の2点しか伝来していない。崇敬はローカルな範囲を超えなかったが、多くの巡礼が訪問したであろうことは現存する見事に彫刻が施されたエティエンヌの墓が証言している。

『伝記』は荒れ野の共同体を完全に孤立した存在としてではなく、社会の内にある存在として描いている。まず、エティエンヌはラ・シェーズ・デュー院長に助言を求め、ベルトランという隠修士から訓練を受け、リモージュ司教の承認を受け、聖務は参事会戒律に従い、生活は隠修士の共同体を形成した。仲間のピエールとの間で主導権争いが起こるが、シャルトル司教の裁定でエティエンヌが修道院長（prior）とされた。次に、採用すべき規則と慣習に関してラ・グランド・シャルトルーズに旅して院長ギーグに相談をし、シトー会を勧められると近隣のダロン修道院の指導でシトー派の慣習を受け入れた。1142年にはリモージュ司教が新教会を聖別し、エティエンヌを修道院長（abbas）として祝福し、最後に1147年の修道会総会に出席し、教皇エウゲニウス三世を前にしてシトー会に正式に加盟した。このように制度化の過程を記す『伝記』からは、世俗を捨てた後に自らの靈性にふさわしい制度的枠組みを探し求め、教会の中で自らの活動に正統性を与えることに心を砕く姿が浮かび上がる。また、世俗社会との多面的な関係が描かれるが、とりわけ隠修士の時代から共同体を贈与・生産・再分配を通じた財の循環の結節点の位置を占める存在として捉えている点が特徴的である。飢饉の際の貧者への食料の援助は修道院に靈的・社会的意義を賦与する活動として重視され、食料増殖の奇跡を前にして地域の聖俗・貴賤が混じり合い、集合的に沸き立つ場面が描かれる¹⁰⁾。さらに、食料の安全保障だけでなく、英仏両王の対立やヘンリ2世の息子たちの反

乱を背景にして戦争や略奪に明け暮れる地域の領主層に対する農民や貧者の守護者としての役割が強調される。このような活動にオバジーヌの初期の共同体の包摂的な志向の持続を見てとることができるだろう。

翻訳の底本としてはバリュエズ版に基づくオブランの校訂版を使用した。また、オブランの仏訳とペピンの英訳¹¹⁾を参照した。聖書引用は『新共同訳聖書』に依るが、文脈に合わせて一部変更を加えた。

ここに院長エティエンヌの伝記の序言が始まる。

聖人の事績を記すことは今や慣習ではなく、廃れてしまったが、語る人がいないか、聖人自身が乏しいか以外の他のどんな理由でこうなってしまったのかははっきりしない。今やこうした人は消えてしまったので、書く人も書かれる人もほんのわずかし、あるいはほとんど全く見つからない。そこで、預言者は「主よ、お救いください。聖人は絶え、人の子らの中から真実は消え去りました」（詩 12：2）と叫ぶのである。しかし、生涯と行いの点で神の目の前で輝くだけでなく、教会で聖人と認められる隠れた聖人がなお存在しているし、かつて存在した。それにもかかわらず、彼らの伝記が他の人々のための手本として書かれないのは、彼ら自身が知られることを恐れ、「燭台の下よりも升の下に」（マルコ 4：21）置かれることを望んだからであり、あるいは聖人伝を書こうと望む者によって現在では特に求められる奇跡であまり有名でなかったからである。こうした人は曇った月や欠けていく月に似て、昇るときには何も見えないが、満ちたときには天上で燃え上がる。地上で輝かしく見え、天上に思いをめぐらす人は満月に似て、光の明るさのすべてをこの世に、闇の漆黒を天上に見せる。

しかし、私たちの時代には月のこの両方の側面を見せる聖人がいた。こうした人は隠された聖性の功德により神の前で栄光に満ち、しるしと奇跡により人の前で驚異として輝いた。こうした人の伝記は書かれる価値があった。院長聖ベルナルと司教聖マラキの伝記がそうである¹²⁾。前者は3

巻の形で、後者は聖ベルナル自身によってそれ以前のどの優れた著者の作品にも劣らないほど洗練された思考と文体で作成された。

私自身は、そう思われるだろうが、主にして父たるオバジーヌのエティエンヌの伝記を、どのような書き方であれ、執筆したい気持ちがかき立てられることはなかったが、頼まれるどころか上長と父たちの命令により強いられた。これほど大変なことに従うのは危険であったが、従わないことはもっと危険であっただろう。この仕事を通じて名を知られるためにはなく、この聖人の生涯と生き方が隠されたままにならないように私は執筆したのであった。現代と未来の人々が、彼が誰でもどのような人なのか、どのように生き、どのように世を捨て、どれほど彼自身ばかりでなく、他の多くの人々に利益を与えたのかを、また、どれほど彼が生前に成しとげた、あるいは成しとげるべく残した仕事が素晴らしく、卓越しているのかを、最後に、どのように彼は栄光に満ちた、驚くべき死でもってこの生涯を終えたのかを知るようにである。

この私たちの努力が多くの人々に軽蔑され、拒絶さえされたとしても、とりわけ作品が新奇であり、著者が不相応なのだから驚くべきことではない。人間の魂には、作品を著者によって捉え、古いものほどいっそう承認するという特徴があり、書く人や書かれる人が地上に生きている限りは作品を容易に受け入れるべきだと考えないものである。それで、ヨハネス・クリュストモスは「生きた動物の肉はまず殺されない限りは食べられないように、先人の著作は死後にならないと権威として受け入れられない」と述べている¹³⁾。だから、主は晩餐に招かれた人々に「牛や肥えた家畜を屠りました。さあ、婚宴においでください」（マタイ 22：4）と言うように命じられた。読むときに神の言葉の宴を人間のものではなく真に神のものとして理解するように、あなたがたのために書いた人々は既に死んでいるか、殺されているのである。今は受け入れられないので少なくとも死後に受け入れられるようにこう述べているのではなく、このことで不平を

言う者があることを知っているから述べているのである。私たちが不相応で未熟だから、あるいは私たちが述べる者はまだ列聖されていないから、私たちがこれを書くべきではないと彼らは言う。しかし、大部分が亡くなる前に書かれた多くの聖人の伝記を私たちは読んでいます。こうした人や似たような文句を言う人に対しては、神が望まれるならば、この作品は残り、それが神の御意志でなければ、残らないだろうとだけ答えておく。さらに、この伝記が残り、神の恩寵により、私たちが述べる人の賞賛のため、そして、多くの人々の教育のために役立つことを私たちは信じ、疑うことなく期待している。

序言が終わる。

彼の伝記が始まる。

1. エティエンヌはアキテーヌ地方のリムーザン地域の名門で昔からキリスト教徒の家系の両親のもとに生まれた。父は彼と同じくエティエンヌであり、母はゴベルトという名であった。実際、両親は非常に豊かでも完全に貧しいわけでもなく、暮らすのに十分なだけを持っていた。他の善き行いでも賞賛に値したが、彼らは自分たちだけでなく神の教会にも必要な神に愛される子を産んだ。

ある夜、妊娠し、膨らんだ腹に彼を身ごもっているときに母は幻視を見せられた。この夢の中で彼女は息子の代わりに子羊を産んだようであり、成長すると彼に羊の大群が託された。ある聖なる神の人にこのことを話すと、天上の教会で教育されるようにキリストによって多くの魂が託される息子を産んだのだとその人から聞いた。聖バルナールの伝記にあるように¹⁴⁾、この女性は子羊ではなく、白い子犬を見たのだと言う人々もあった。しかし、両方ともその意味において真実であるように見えた。無垢の純粋において子羊であり、群れを守る、すなわち魂を熱心に世話する点で子犬、むしろ吠える犬だからである（イザ 56：10）。他の話題に移るのを急いで

いるので、主のために彼に託された群れのためにどれほど吠えたのかについては詳述しない。

彼が誕生し、成長すると、ある教会の学校で聖書の教育を受けるために教師たちに託された¹⁵⁾。彼らからよく教わり、短期間で十全に神の礼拝と魂の教育に関する聖書の知識を習得した。

父の死後に成年に達すると、自分の家全体の管理を引き受け、母と兄弟と姉妹と彼の家族全体を熱心に導き、規律をもって治めた。しかし、より高い道義に促されていたので、親族よりも貧者の世話に熱心だった。人間の性質によって前者に、慈悲と永遠の報いへの期待によって後者に引きつけられたからである。彼は孤児の父、貧者を養う者、「旅人を迎える者」（エス 16：10）、寡婦を敬虔に慰める者であった。「貧しい人々にはふるまいを与え、その善い業は永遠に堪える」（詩 112：9）と詩編が述べることを実現するために、彼の手は受け取るよりも与えるためにさしのべられた。貞潔で節度があり、親切で皆に愛想がよく、寛大なことを示したので、周りのすべての人々が彼の勤勉と非常な知恵に驚嘆した。彼は生き方のほうにより気を配っていると思われていたが、なお狩猟や世俗の悪ふざけに入れ込んで、服装に気を配っていた。実は、むしろ虚栄を警戒し、内心の計画を隠すために、そして他の人々が自己評価以上に自分を評価しないように、そう見せかけていたのだった。

2. 神から賜って司祭の職の恩恵に与った後、彼は世俗の生活を完全に捨て、以前から心の中で蔑んでいたものを行動と生活様式において放棄した。笑いやかつての悪ふざけは悲しみと悲嘆の喜びへと変じ、野獣の狩猟は魂の捕獲に変わった。今や高価な衣装の装飾は捨てられ、贅沢な食事の準備は軽蔑された。柔らかい衣服の代わりに苦行衣を身に着けて、甘い食事の代わりに涙のパンと涙の飲み物を取ったのである（詩 80：6）。要するに、彼は自分の身体を荒々しく扱い、寒さと断食で身体を殺しかけた。実際、真冬にあらゆるものが氷と寒さで縛られているときに彼は自分の斧

で氷を割り、首まで沈んで強い寒気が自分の内部に浸透するまで長い間耐えた。ある意味で詩編作者とともに「わたしは雪の中の革袋のようになって、あなたの掟を決して忘れません」（詩 119：83）と述べていた。

彼は断食に並外れ、徹夜に励み、いつでも祈ったが、神の耳にこの祈りを捧げたのは言葉の羅列ではなく、涙の敬虔であった。彼の言葉は塩で味付けされ、愛で燃え立ち、聴く者に神への愛の炎と知恵の風を吹き込んだ。人に教える才能を主から賜り、彼の口から出た言葉を聴いて飽きる者はなかった。もし彼が不在で誰かが教会で話すときには、エティエンヌの讃嘆すべき、熱意に満ちた教えのせいで、その人は愚か者として人々から軽蔑された。これは不当なことではなく、彼は口で教えたことを行いによって推奨し、立派な生涯によって自分の言葉が全く正しいことを示したからである。深刻な病や避けられない都合に妨げられない限り、どんな配慮や用事でも自分の務めを中断せず、聖務に絶えず注意し、疲れることがなかった。自身が仕える教会において祭壇での奉仕に属する物、すなわち、聖具や祭服や様々な装飾品に対して非常に細心であったので、他の事についても称賛すべきで、あらゆる点で非難の余地がないように見えた。軍事や他の職において非常に訓練され、熟達し、正当にも達人と見なされるほどの人がいるが、同じように祭壇での奉仕において彼は全く誠実かつ清潔な達人・指導者であると見なされた。聖なる書物、特に福音書注解の読書に励み、自らのために読み、他人のために教え、永遠の救いの準備をした。この世の蔑みと来るべき世の栄光についてそこに多くを見出したが、彼の心は現在への軽蔑と未来への希望へ大いに燃え立ち、預言者のように「いつ御前に出て神の御顔を仰ぐことができるのか」（詩 42：3）、あるいはさらに「私の目はあなたの仰せを待って衰えました。力づけてくださるのはいつか、と申します」（詩 119：82）と述べた。

こうした希望に燃え上がり、地上的な配慮を投げ捨て、貧しく、裸足で、貧しきキリストに自由な足取りで従うように、日々、この世を捨てる決心

をした。しかし、無謀に助言もなく行うように見えないように、メルクールのエティエンヌという名の敬虔で聖なる人のもとへ赴いた¹⁶⁾。この人は聖ロベールに育てられたのでその弟子であり、聖性の評判はこの地域全体で名高かった。この人を訪れ、心の計画を打ち明けたのは、誓いを疑ったからではなく、助言を求めるためであったが、この時、この尊敬すべき人は、「愛すべき息子よ、神によって引き起こされたあなたの願いの実現をあまり長く先延ばししないほうがよい。準備されていることを延ばすのは害があると知っているのに日々先延ばししないことだ。さあ、むしろ心に思い描くようにこの世の配慮を投げ捨て、キリストの足跡を幸いな足取りで追いなさい。あなたの手本によって多くの者が神に回心するように」と答えた。神の託宣のようにこの返事を信頼し、喜んで自宅へ帰った。

この計画にはピエールという名の仲間・同志がいたが、驚くほど無垢な人物で、最近司祭に叙階されたばかりだった。この人だけに彼は心の秘密を打ち明けたが、ともに世俗を捨て、ためらうことなく聖なる修行服をまとい、生涯の終わりまでこれを貫くという提案であった。この聖なる人たちは神に誓ったことの実現を急ぎ、この世のしがらみから解放され、ともにキリストのもとへ至るために、自由で解き放たれた足取りで救いの道を歩むようにした。

3. こうして数日後、灰が与えられる習わしの四旬節の前週の木曜日に、最後の別れの挨拶を言うために親類を集め、厳かな食事を出し、残った食べ物はすべて貧者に分配した。次の夜を徹夜と祈祷で過ごし、神が先立って彼らの心に吹き込まれた願いを神の助けで追求できるように神の慈悲を懇願した。そして、敬虔な服を身にまとい、日が照る前に故郷の地を後にして、亡命するように裸足で出発した。

この地方にベルトランという名の隠修士がいて、魂の教育の世話をし、その教えに従う数人の弟子がいた¹⁷⁾。彼らはこの人を探し求めたが、十カ月をともしただけであった。退屈を感じたからではなく、むしろ十分

な試練を受けた上で、後退するのではなく、勇敢で救済に近い道を求めたからである。実際、彼と過ごすこの短い期間が気に入らなければ、自由になんの争いもなく別の場所に移れるという条件で彼のもとに来ていた。ここを立ち去ると、彼らはあらゆる敬虔な場所を歩き回った。もっと完全な場所でもっと完全かつ勇敢に誓いに従って神に奉仕するためであった。しかし、そうした敬虔な生活はまだこの地域では栄えていなかった。全能の神はこの聖人に対して自らが予定したことを実現させるために、彼らが誰かの教えに従うことを望まなかったのである。

4. それで、神の人は尊敬すべき友とともに進み、この地域のいたるところを歩き回り、ついにオバジーヌの森に到着した。ここはすべての方向を森の暗がりと大量の茨の茂みが囲んでいるのでそう呼ばれたのだと思う。生い茂る森に加えて、この場所はあちらもこちらも切り立った岩と下流へ流れるコレーズと呼ばれる川に囲まれており、この場所に少なからぬ魅力を与えているように見える。聖なる人たちは復活祭前の金曜日にこの場所に裸足で到り、恐れることなく奥へと入った。それほど遠くないところに谷間の低い狭い平地があり、茨の藪と茂みが広く密集し、小川がその中を流れている。多くの曲がりくねった道と険しい回り道を辿った後に谷の窪みと山の傾斜を通り、彼らはこの平地に入った。この日とその翌日は食事も他の慰安もなくそこに留まった。

三日後、主の復活の日に近隣の教会に行き¹⁸⁾、靴を借り、彼らの一人がミサを歌い、仲間に聖体を授けた。これが終わると靴を返し、誰も食事に誘わなかったので悲しんで元の場所に帰り始めた。

山の尾根を少しずつ登り、疲労と空腹に苦しみ、山頂でしばらく休んだが、ポヤックという名の近隣の村のある女性が彼らに近づき、パンを半切れと牛乳一瓶を差し上げた。これを非常に喜んで受け取り、後に聖なる人は食べ物について自分の生涯でこれ以上望ましいものを受け取ったことはなかったと証言した。それから、元の場所に帰り、この食べ物で元気を回

復した。まだ自分たちが何者で、どこにいるのかもわからなかったので、植物の根や荒野で見つけられるものを除いては人の食べ物がない状態でそこで何日も過ごした。しかし、慈悲深い神は苦しみを和らげ、彼らの手本により周囲の他の人々に教えることを願われたので、彼らが人々に知られることをお望みになった。

ある日、近隣に暮らす家の父が教会に行ったときに、そこにいる貧者たちに食料を提供しようという考えが、神の息吹により、心に浮かんだ。そこに向かっていていると思っていたが、不意に道に迷い、彷徨い歩くようにしてこの場所に辿り着いた。しかし、誤って道に迷ったわけではなかった。かつて復活祭の祝日に司祭を聖ベネディクトのもとに連れて行った案内人に導かれたのである¹⁹⁾。

こうして前述の男性は修行者の衣服を身に着けた見知らぬ人が定着しているのを見て、まず、驚き、それから憐れみ、持っていた食べ物を差し出した。そのおかげでこの日とその翌日は持ちこたえた。間もなく羊飼いたちに発見され、近隣のあちこちに話が広められると、多くの人々が彼らを訪ねて来始めた。人々は身体の糧を持って来たが、彼らの言葉から命の糧を持ち帰った。しかし、以前に来た者たちのようにここに長く留まらないのではないかと恐れた。

5. 偽の隠者がかつてここにやって来て、ここに留まることを望むふりをして、礼拝堂のような小屋を建てた。人々が多くの物を提供すると喜んで受け取り、使いきれないものは金銭に換えた。それから、やって来た人々に、新しい荘厳なミサのために一致して集まるべき日時を示した。その日の前日の夜、なにを考えたのか私は知らないが、持ち物すべてを持ち去って、突然姿を見せなくなった。この突然の雲隠れのせいで集まった人やこれを聞いた人は馬鹿にされ、感情を害され、同じように振舞うのではないかと考えて新来者に対してより厳しい態度を見せるようになった。

こうして彼らは人々に見捨てられ、飢餓の苦しみに耐え、木の柔らかい

部分やあらゆる植物を貪欲に採集し、美味な食事として自分たちに供するほどであった。飲み物はわずかな水だけで、壊れた瓶のかけらから汲んで自然の要求を満たした。実際、何日間もこの瓶を使った。硬い地面が彼らの寝床であり、そこに休めるためではなく痛めつけるために断食で疲れた四肢を伸ばした。枕が欠けることがないように硬い石を頭の下に置いたが、睡眠は妨げられ、軟弱さは追い払われた。衣服をあまりに長い間着ていたので、非常な汚れや虱のせいで衣服を替えることを余儀なくされた。衣服を脱いで、火の上に振りかざしたり、水の中に入れたりした。洗って少し絞った衣服をもう一度着たので冷たい衣服で身体は濡れ、重さと冷たさで死にそうになった。とりわけ冬の間、洗濯の必要がないときに、苦行の意志だけからそうしたのだった。しかしこれだけでは不十分なので父なるエティエンヌは銅鎧を着た。何年も密かに身に着けていたが、使い古されて徐々に裂けた。こうしてこの善き競技者は主の日に魂が救済されるようにキリストのために自らの身体を痛めつけた。

6. 彼は小さな木の側に粗雑な屋根に覆われた木造の小屋を建てた。そこで尊敬すべき仲間とともに昼も夜も連続祈禱と詩編朗誦に没頭した。疲れた四肢を少し回復するわずかな休憩の後に、神の称讃のために一緒に立ち上がった。眠りに襲われるのを感じるとすぐに、枝の束をつかみ、脇を露わにし、交替で叩き、お互いに打ち合った。彼らの身体は断食で消耗し、徹夜と労働の重みで疲弊し、いつまでも続く枝打ちの痕がついた。こうして体を服従させて肉体ではなく精神の果実をもたらした。使徒は自らについて「自分の体を打ち叩いて服従させます。それは、他の人々に宣教しておきながら、自分の方が失格者になってしまわないためです」と述べた（一コリ 9：27）。彼の聖なる顔はしわが刻まれ、断食のために蒼白で、まばらで薄いひげを生やしていたが、彼がこのようにしたことの意味が明かであった。しかし、彼の頭髮はその状態を保ち、老齢でも変わることなく、全く禿げたり、白髪にならなかった。上述したようにしわが老齢を証言しな

ければ、若者と思われたであろう。

7. この後、上述した彼の仲間が同意を得てリモージュの町に行ったが、最近彼らのもとに來たベルナルという名の聖職者も付き添った。この人はすべてを捨てた後に、この場所で回心し、ここで生涯の終わりまで敬虔に生活し、幸福な死を遂げた。この人の話から私は聖人の行いについて多くを学んだが、この世において彼の随伴者で、信心において彼の死まで分かち難く結ばれていたからである。

町に着くと、当時の司教ウストルジュと会談し、彼らの目的や聖人の計画を熱心に打ち明けた²⁰⁾。司教は彼らを祝福し、持って行った十字架を聖別し、祝福した水とともに十字架を返した。そして父たちから伝えられた慣習にあらゆる点で従うという条件でミサを執行する権限と修道院を建設する権限を与えた。こうした言葉を聞き、受け入れ、喜んで父のもとに戻った。彼らが持ち帰った話を承諾するとすぐに、彼は川のもっと奥の方に住居を移転した。

こうして、有害なもの、無用なものはすべて切り捨て、修道院に倣って建物群を建設した。すなわち、礼拝堂、寝室、食堂、台所、それらの真ん中に回廊であり、これらすべてでかろうじてひとつの大きな建物の広さを占めるに過ぎなかった。

すでに神に回心した何人かは彼の弟子の身分に属し、規律の軛に従い、きわめて険しく厳しい生活を彼とともに送った。そのため、彼らを模倣する者は少なく、自らの肉体の敵となり、現在の生活のことを考えないような者ばかりであった。

神のものは賢明に受け入れ、この世のものは拒み、聖務において参事会戒律に従い、生き方において隠修士の生活を送った。参事会員は戒律に従って神に歌うとはいえ、手の込んだ食事から贅沢で豊富な食べ物をとり、長く休息し、手の労働は全くしないか、ほんのわずかである。聖なる人はこれを非常に嫌って、靈的な読書と神の称讃に求められる時間を除き、一

日のすべてが手の労働に充てられるよう定めた。晩にわずかな食事をとり、夜になると少し休眠し、朝課の聖務を行うために起床した。これに聖母マリアとすべての聖人の徹夜の祈り、さらに友人のための詩編と死者のための聖務を付け加えたが、夜の少なからぬ時間を占めた。しかし、徹夜の祈りの後に残った時間も休憩や睡眠に充てられるのではなく、個人の祈祷や手の労働に捧げられた。家に必要なもの、灯火の下で座って作られるものはすべて昼ではなく夜に作られたが、夜により重要な仕事に取り組んだからである。一時課の後に平伏して七つの詩編と連祷を朗読し、よく起こったことだが、靴がないということがない限りは、直ちにミサが続く。ミサが歌われるとすぐに手の労働に出かけたが、神の人は時々、修道院の中に留まった。

こうしたときは彼は一人でいて目撃者も裁き手も恐れなかったのだから、どれほど多くの涙で、またはどれほど多くの嘆息と溜息で自身の熱狂的な希求を満たしたのか誰がわかるであろうか。そしてこのときに睡眠や休息の余地があったと誰が考えるだろうか。わずかな休息にも耐えられず、祈祷と詩編の朗読で夜の聖務を先んじる者であるのに。しかし、これは密に行われたことで、知ったことよりも想像したことを書いたと思われないうように、十分に説明するのは控えておく。そういうわけで、これは省略し、知られていることに目を向けよう。

8. 兄弟たちが不在で家に留まっているときは、既に述べた事に専念したばかりでなく、台所仕事も熱心に行い、食事に必要なと思われるものを丁寧に用意した。彼自身が食べ物を集め、用意し、自身で材木を運び、切断し、自分の肩で水を担いだ。それから、火を起こし、野菜と豆類を料理し、食事として兄弟たちに出し、マルタのように不安そうに慌ただしくしていた（ルカ 10：40 参照）。食事の後に皿を集め、洗い、もし食べ物が残っていたならば、貧者がいるときは分配した。彼らがいなかったときは、再び料理に加えるためにきちんと保存した。弟子たちも長い間このようにした。

貧者がいないときはいつも、食事とパンで残った物はなんでも、貪欲からではなく謙遜から兄弟たちに再び出されたが、祝福されたものなので、どんなものでも不注意で無駄にならないようにしたのであった。

9. 彼は兄弟たちの、とりわけ若者と少年の規律違反と逸脱行為を、見る者たちを恐れおののかせるほど厳格に処罰し、非難した。規律の厳しさは甚だしく、少し目を上げたり、わずかに微笑んだり、命令なしで何かをしたりすると厳しい懲罰に処せられた。命令や課された労働で必要とされない限りは侵すことが許されない制限が定められた。

昼も夜も、回廊だけではなく、学問や労働が行われるところはどこでも、彼らの間には完全な沈黙があった。初期にはこれを非常に厳格に守ったため、挨拶する者に挨拶を返さず、尋ねる者に答えず、舌の機能を失って口がきけない者のように、旅の人で質問をしてくる人と全く会話もしなかった。ついに、多くの人々が彼らのもとに訪問に来て、帰ってから彼らについて、彼らは誰でどのような者たちなのか、彼らの生活の規則はなにか、彼らの師は誰なのかと仲間に尋ねられると、次のように答えた。「あの人たちの生き方を簡単に述べることはできません。尋常でない沈黙に包まれて、言葉ばかりでなくある程度まで声音さえも聞こえません。ですが、口は閉ざしていても、行いは黙っていなくて、創造主の神により彼らの敬虔な生活をはっきり証言しています。さらに、彼らの中のひとりが他の者たちを統率していますが、その人の指導で育てられ、その人の手本で教えられ、輝いていました。彼の言葉は熱い炎のように聞く者の心に火をつけ、愛で満たしたので、自身の人格を保ちながら、ある意味で別の者になって、彼らの生活と慣習の性質は一変しました。彼の様子や態度やすべての行いは説教のようで、生活と慣習の様式と行動の規律だけを示していました。だから、言葉がなくとも十分に教えることができる師を持つ弟子たちがこうであるのは別に驚くことではありません」と。確かにすべての者がこのような人々についてこのように言えるわけではなく、知恵と善意で燃え立

つ人だけであった。悪人は、そうしたくないし、できないので、善人について善いことを言えないからである。このような評判が広まり、多くの人々がキリストの戦士に回心し、世俗の虚栄を捨て、困難な生活と厳しい規則に従うことを恐れなかった。彼らは「命に通じる道は狭く、それを見いだす者は少ない」ことも、さらに「滅びに通じる道は広々として、そこから入る者が多い」(マタイ7:13)ことも知っていた。そこで、滅びる多数とともに非難されるよりも少数とともに救われることを望ましいと考えた。

10. さらに、多くの者たちがやって来て留まり、この場所が一杯になると、父エティエンヌはどの場所にふさわしく定住させられるかを考え始めた。しかし、彼の心は孤独を希求する気持ちで悩み、激しく苦しんだ。他者の世話をするのが耐え難く、多くの者を指導することに我慢しなければならないことを恐れた。実際、多くの人々の群れをそこに集めるためにこの前述の場所を探し求めたわけではなく、誰の称讃も非難も恐れることなく、孤独に暮らし、もっと人目に触れずに自由に神に身を捧げ、もっと制約なく肉体を痛めつけるためであった。

時が経つにつれ、肉体の多くの苦痛を自身に課すのを他の人々の警告や懇願で中断することを余儀なくされた。そうしてもらえないと彼ら自身が彼と同じことをしなくてはいけなかったので、自分自身ではなく、彼らを労わって厳格な実践を少し緩和したのであった。

彼はまたサラセン人のところに同行するように頻繁に仲間に話して説得しようとした。おそらく説教で何人かを回心させられるかもしれなかったし、あるいは、自身がキリストのために不信心者たちに殺されるかもしれない。彼の尊敬すべき仲間はできるかぎりの警告を与えてそうしないように説得した。いまだ信仰がなく、おそらく永遠の命を予定されていない人々の中で実を結ばない努力をするよりも、既に信仰のある人々を不正な行いから言葉と見本によって回心させるほうがよいと言った。

実際、全能の神は、御自身の計画を見誤ることはなく、予定され、時に
おいて示された牧者に対して見知らぬ群れを御用意なさっていた。彼は預
言者とともに「わたしの知らぬ民もわたしに仕え、わたしのことを耳にし
てわたしに聞き従った」（詩 18：44-45）、あるいはさらに「ここに、わた
しと、神がわたしに与えてくださった子らがいます」（イザ 8：18；ヘブ 2：
13）と言うだろう。キリストはその町を奥深い所ではなく、高い所に建
設することを望まれ、「山の上にある町は、隠れることができない」（マタ
イ 5：14）と述べられた。徳から徳へと昇り、シオンで神の中の神を見る
ように彼を低い所から高い所へ登らせなされた。

11. ついに、この広い森を歩き回り、東に傾く丘の頂にすぐに到り、こ
の丘から登る者も下る者も行ける位置にある尾根を見つけた。この場所に
兄弟たちを呼び、以前の住居と同じように、数と広さの点で幾らか大きな
住居群を建てた。ここが再び多くの住人で一杯になると、内側の部分が外
に置かれ、外側の部分が内に留まり、こうして拡張された住居はより多く
の数の兄弟を収容できた。最終的に現在の状態に至るまでにこうしたこと
が二、三度なされたことが知られている。しかし、この施設群に心をかき
乱された悪魔が多くの策略をめぐらして破壊しようとした。

12. ある日、建設中の礼拝堂の屋根の内部を木の板で覆っていた大工に、
この悪魔が黒人のような姿をして接近した。私はかつてこの気の毒な者
を見たことがあった。この男は夕刻に自分の鉄製の道具を回収して帰宅し
ようとしたが、他の悪魔に抜きんでた、より残忍なある悪魔が、「あなたは
どなたですか。そしてこの場所でなにをしているのですか」と話しかけた。
自分は大工であり、金で雇われているので、この森に住む修行者たちの命
令で前述した仕事をしているのだと悪魔に答えた。悪魔は彼に「あなたが
言うのとは違っています。彼らは不敬虔で頑迷で偽善的で狡猾です。人々
の賞賛を集め、多くの財と富を蓄積するためにここに來たのです。むしろ
私たちの助言を信じて、ここに建てられたすべてに火をかけるのです。こ

れ以上、彼らが人の賞賛を追い求めて無垢な者たちを欺かないように」と言った。こうした言葉にこの男は、「今、貴様らが邪悪であらゆる悪徳に満ち、悪魔の息子らであることを知った。聖人たちのまっすぐな道を悪意で破壊しようと努めているのだな。だから、悪魔のお前の助言に同意することなどないし、始めたときよりもいっそう聖なる人々の命令に従おう。私は聖人たちへの従順の点でいっそう敬虔であり続けるつもりだ」と答えた。こう言う工具を片付けるために梯子を登って屋根に上がろうとした。悪霊たちは非常な怒りに駆られて彼を梯子から突き落とし、何度も殴ったために彼は全身が鉛色になり、腫れ上がり、頭をひどく打った。それからようやく少し息をついてから起き上がり、夜になると大いに苦勞して宿坊に至り、「ああ、ああ、私は惨めで不幸だ」と叫んで言った。彼の声に動転して兄弟たちは神の人とともに急いで駆けつけ、悪魔たちが無慈悲に殴打したので苦しみ、ほとんど正気を失っているのを発見し、彼をベッドに寝かせた。そこで聖水をまき、主の十字架でしるしをつけ、さらに、神の僕たちの祈りで力づけられ、神の人の手を押し当てられたおかげで、数日して四肢全体の回復を得た。

この人がどれほど賞賛されるべきかが知られるように、ここでこの話を思い起こすのがよいと判断した。彼のことを悪魔たちは非難しようとしたが、いっそう広範囲に宣伝してしまったのである。

13. この荒れ野に最初に住み始めたとき、悪魔が彼を非常に激しく迫害したために夜に休息さえできなかった。兄弟たちは彼の叫びに目を覚まし、ベッドから飛び起き、祈祷と徹夜でほとんど一晚中眠らずに過ごした。悪霊の攻撃が再来するのを感じたときに霊的な武器をとり、目と手を天上に上げ、攻撃する者たちを勇敢に打ち負かし、「主よ、わたしと争う者と争い、わたしと戦う者と戦ってください。大盾と盾を取り、立ち上がってわたしを助けてください」（詩 35：1-2）と自信に満ちて叫んで言った。

彼の手本のおかげでこの荒れ野が修道士の聖歌隊で溢れ、既に捕らえた

者たちを失って一人残されるのではないかと悪魔は恐れた（後に実際にそうになった）。こうしてイザヤがかつて預言したことが実現された。「荒れ野よ、荒れ地よ、喜び躍れ。砂漠よ、喜び、花を咲かせよ。野ばらの花を一面に咲かせよ。花を咲かせ、大いに喜んで、声をあげよ。砂漠はレバノンの栄光を与えられ、カルメルとシャロンの輝きに飾られる。人々は主の栄光と我らの神の輝きを見る」（イザ 35：1-2）と。

14. 修道院の建物群が再び建設されるとすぐに神の人は兄弟たちとともに元の場所から移動し、この場所をオバジーヌと呼ぶことに定めた。

このとき、エティエンヌ師とその尊敬すべき仲間の間でどちらが兄弟たちの指導を引き受けるべきかで論争が生じた。多くの者が今するように名誉を自らに不当に要求するのではなく、お互いに名誉を辞退し、自らを相手に従属させ、謙遜のために争った。その時まで全員が父エティエンヌに従ったが、彼は自分の意志ではなく自身をお遣わしになった方の御心を行うために来られた方のことを思い起こし（ヨハネ 5：30 参照）、こうした気高い謙遜を奪われることを望まず、自分の意志を他人に押し付けるよりも相手の意志を行うことを好んだ。それで、お互いに相手を自分よりも優先することを望み、どちらも相手より重んじられることに平静でいらなかった。彼らの間で生じた論争は、当時この地方に滞在していた教皇特使のシャルトル司教の面前に両者が連れて行かれるまで収拾しなかった²¹⁾。しかし、そこでもひとつの決定に至れなかった。一人が相手のほうが学問に精通していると述べ、もう一人も相手のほうが何事においても賢く、生き方と振る舞いにおいて優れ、他人を指導するのに適していると断言した。そこで、尊敬すべき教皇特使は双方の資質を慎重に検討した後に論争に終止符を打ち、エティエンヌ師に修道院長の職を委ね、彼に従う者たちの魂の世話を命じた。

15. 院長になった後にも彼自身は以前と同じ生活と慣習の仕方で生き、他の人々にもそう生きるように教えた。徹夜と祈祷の同じ実践、昼と夜の

詩編の同じ朗誦、何事においても同じ沈黙がどこでも維持された。以前よりも量的には豊かになったが、断食の慣習と食事の節制は同じように維持された。近隣の人々は彼らの評価の高い本物の信心と堅固な安定を見て、すべてを消費できないほど多くのものを持って来た。今や「この民は必要以上のものを携えて来ます」（出 36：5）と言うぐらいに達した。しかし、神の従者たちはかつての貧困を忘れることはなく、新しいものが来ても、古いものを決して捨てず、まずカビの生えた古いものを適切な量だけ消費した。彼らはこれを貪欲ではなく、謙遜に配慮して行ったのであり、このように不味くすることで味覚を食べ物への過剰な欲求から遠ざけて食欲を抑えたのであった。与えられたものはすべて秤で量って彼らの間で非常に平等に分配されたので、より多いとか少ないと言って誇ったり、不平を言ったりする者はいなかった。若さや重病で妨げられない限り、主日を除いては、夏も冬も断食を解こうとする者はいなかった。これを定めた本人は、これだけでは満足せず、主日においても断食をした。ついに年長者たちの助言で主日と復活祭後の 50 日間の食事を再開することになったが、確かに主日に関しては容易く同意したものの、復活節については修道士になるまで説き伏せられなかった。節制への熱意が彼に火をつけ、自分も他人も非常に厳格に扱ったので、彼の生き方の厳しさは、イエス・キリストの助けに支えられない限り、他の人には耐えられるものではなかった。しかし、この点で彼は決して無慈悲ではなく、肉体から取り上げたものを魂に与え、身体の不利益を霊的な利益で償った。

手の労働は彼にとっても兄弟たちにとっても休みなく続き、通常よりも激しいもので、このために丸一日でも足りなかった。そのせいで日々の仕事が少なくならないように、食事を晩にまでよく延ばした。夜が長くなる冬には、終課が終わると、全員が一カ所に集まり、詩編の半分を歌い終えるまでずっと特定の仕事に専心し、祈りが終わるとこの仕事を終えて寝室に向かった。食事の際に読書が、詩編朗誦の際に手の労働が欠けることが

ないように完全に配慮した。昼間は熱心に農作業を行い、鋤で土地を耕し、住居や庭の空間を広げるために実のならない木や茨や藪を完全に刈り取った。彼らはまた自分たちのために施設を建て、山から切り出した石を槌で砕き、自分たちの肩で建設現場まで運んだ。多くの人間でも運べないのに、こうした巨大な石が四人の兄弟たちに運ばれるのを見るのは、そして、どんな荷物も運んでいないように思うほどに軽快に進むのを見るのは驚きであった。こうした仕事やこうした種類の労働に全員ができる限り専念したが、熱意と身体の高さで卓越した者たちが最も熱心に取り組んだ。一方、身体が虚弱な者やこうした技を持たない者は書写やもっと軽い仕事に従事した。重労働で絶え間なく疲弊していたが、断食が減らされたり、食事が増やされたりすることはなく、より良い食べ物やより豊富な食べ物の助けもなく肉体を労働に用いた。ファラオがイスラエルの子らを苦しめることは知っていても、助けることを知らなかったように、彼らの師は同じ仕方で行動したが、意図は同じではなかった。彼は兄弟たちがわずかな食料で満足することを望み、肉体を苦しめ、魂を強くするために重労働を課したが、逆に、ファラオは女性の肉体を養い、男性の魂を殺したのである（出1：22 参照）。

16. この人は規律に熱心で、違反者の過ちを矯正するのに非常に厳格だった。実際、上述したように、もし教会で少し目を上げたり、少し微笑んだり、居眠りをしたり、持っている本をぞんざいに落としたり、不注意に物音を立てたり、あまりに速くあるいは下手に歌ったり、なにか不規則な動きをしたりすると、直ちに頭を杖で、あるいは顔を掌で叩かれることになり、叩く音が聞く者全員に響き渡った。少年を矯正し、他の人々を恐れさせるように、こうした措置はとりわけ年少者に用いられた。

高貴な出自の修練者が、教会で本を持ち、側にいる仲間の注意を引いて本の中のなにかを指でさしたときに、聖人はこれを見て、この者を非難しようとしなかったが、彼の手から本を取り上げ、全員が見ている前で席に

ぶつけて壊し、自分の場所に戻った。こうして人々に恐怖が浸透し、必要だとしても聖歌隊席で本を開こうとする者はほとんどいなくなった。喜ばしき始まりに栄えた頃には、人の数がもっと少なく、生活がもっと完全であったので、こうした規律はとりわけ強力であった。

どこの会派の規則も採用されていなかったのも、師の命令が規則の代わりであったが、その教えは謙遜と服従、清貧と規律、なによりも不断の慈善以外のなにものでもなかった。

これが当時の聖人の真の健全な教えであり、私的にも公的にも自身に従う者たちに説いた。当時はこの規則が行き渡り、ファリサイ派の教えを気にかけることはなかった。しかし、今では私たちは「およ一匹さえも漉して除くが、らくだは飲み込んで」（マタイ 23：24）おり、「薄荷、いのんど、茴香の十分の一は献げるが」（マタイ 23：23）、正義や信仰はないがしろにしている。些末なことを言い立てる一方で肝心なことを無視し、時間の長さに疲弊し、共住する人の多さに圧迫され、最初の活力を捨て、弛緩し、怠慢に振舞っているからである。私たちは虚弱な者に身を落とすことを望み、彼らを完徳へと導くよりも彼らの怠慢に倣うことを急いでいる。当時いた人々はより完全であり、彼らを混乱させる者は稀であるか、存在しなかったもので、当時はこうした必要はなかった。

注

- 1) Vauchez, A., ed., *Ermîtes de France et d'Italie (XIe-XVe siècles)*, Rome, 2003; 杉崎 泰一郎『12世紀の修道院と社会 改訂版』原書房, 2005年。
- 2) Manrique, A., *Cisterciensium seu verius ecclesiasticorum annalium a conditio Cistercio*, t. I, II, Lyon, 1642; *Acta Sanctorum*, maii, I, 1667, pp. 799-808.
- 3) Baluze, É., *Miscellaneorum liber quartus, hoc est collectio veterum monumentorum que hactenus latuerunt in variis codicibus ac bibliothecis*, t. IV, Paris, 1683, pp. 69-204.
- 4) Aubrun, M., ed., *Vie de saint Étienne d'Obazine*, Clermont-Ferrand, 1970.
- 5) Barrière, B., ed., *Le cartulaire de l'abbaye cistercienne d'Obazine (XIIe-XIIIe siècles)*, Clermont-Ferrand, 1989.

- 6) Barrière, B., *L'abbaye cistercienne d'Obazine en Bas-Limousin. les origines - le patrimoine*, Tulle, 1977; eadem, *Limousin médiéval: le temps des créations : occupation du sol, monde laïc, espace cistercien : recueil d'articles*, Limoges, 2006.
- 7) Melville, G., "Stephan von Obazine: Begründung und Überwindung charismatischer Führung," G. Andenna, M. Breitenstein & G. Melville, eds., *Charisma und religiöse Gemeinschaften im Mittelalter*, Münster, 2005, pp. 85-101; Grémois, A., "Les origines contre la réforme: nouvelles considérations sur la Vie de saint Étienne d'Obazine," *Écrire son histoire. Les communautés régulières face à leur passé*, Saint-Étienne, 2005, pp. 369-388; Geréby, G. & Nagy, P., "The Life of the Hermit Stephen of Obazine," M. Rubin, ed., *Medieval Christianity in Practice*, Oxford, 2009, pp. 299-210.
- 8) Grémois, *op.cit.*, p. 370.
- 9) Ibid., pp. 372-373, 377-379.
- 10) Boquet, D. & Nagy, P., "La *vita* d'Étienne d'Obazine (†1159), une aventure alimentaire," D. Boquet, E. Lalou, J.-L. Roch & B. Lepeuple, eds., *Des châteaux et des sources. Archéologie et histoire dans la Normandie médiévale. Mélanges en l'honneur d'Anne-Marie Flambard Héricher*, Rouen-Le Havre, 2008, pp. 529-554.
- 11) *The Lives of Monastic Reformers, 1: Robert of La Chaise-Dieu and Stephen of Obazine*, trans. H. Feiss, M. O'Brien & R. Pepin, Collegeville, 2010, pp. 129-255.
- 12) *Vita Sancti Malachiae*, J. Leclercq & H. M. Rochais, eds., *Sancti Bernardi Opera*, 3, Rome, 1963, pp. 295-378.
- 13) Pseudo-Chrysostom, *Opus imperfectum in Mattheum*, Hom. 41, PG, t. 66, col. 862.
- 14) *Vita prima sancti Bernardi*, PL, 185, col. 227.
- 15) シャルレ修道院に属するプロ（Pleaux）のプリウレの学校と考えられる。
- 16) ラ・シェーズ・デュー院長（1111-1146）。創建者ロベールが1067年に死去した後に入ったので両者に面識はなかった。
- 17) ポワトゥーの隠修士のグリフィユのベルトランである可能性がある。
- 18) コルニル（Cornil）教会と推測される。
- 19) *Vita Benedicti*, PL, 66, col. 130.
- 20) リモージュ司教（1106-1137）。
- 21) シャルトル司教（1115-1149）ジョフロワ・ド・レーヴ。アナクレティスのシスマの際にインノケンティウス2世により教皇特使に任じられた。